

資料紹介

—関西学院大学考古学研究所蔵資料—

藤 原 光 平 真 田 陽 平

1 はじめに

私たち関西学院大学考古学研究所は、2006年に詳細不明の出土資料を数点新たに所蔵することとなった。本稿では、その資料群の報告を行うとともに、それを所蔵するにいたるまでの経緯や、現時点で推測できることを報告していく。それにより、会外の方々にこの資料を広く認識していただきたいと考える。また、会内においても今後の資料保存の一助となることを期待して、これより報告していく。

※本稿の分担内容については、『3 資料の紹介』の「石斧・土玉」は真田が、それ以外は藤原が担当した。

2 所蔵の経緯

まず、今回紹介する資料群を所蔵するにいたるまでの経緯を紹介しておく。

これらの資料群は全て、関西学院大学の元教員であり、考古学研究所の顧問を長年つとめておられた故武藤誠氏が最初に所蔵していた。その後武藤氏が亡くなられ、次に資料群は当時同大学の教員であった福島好和氏が保管することとなった。福島氏は、武藤氏の後を引き継いで考古学研究所の顧問をつとめられておられたが、2006年3月に定年により退官されることとなった。

その退官に際して、福島氏より、大量の書籍や図面類とともに、ご自身で保管していた資料群を考古学研究所に寄贈していただいた(図1)。

この資料群についてはそのほとんどが、武藤氏が所蔵していた頃に阪神大震災の被害を受けて大部分が損壊しており、出土地や出土年代も不明となっているとのことであった(図2)。

しかし、筆者が資料の修復や調査を行っていく過程で、個々の遺物の資料的価値は当初の予想以上に高いものだということがわかってきた。そこで、考古学研究所ではこの資料群をより多くの人々に認識してもらおうと考え、今回資料群の紹介を行うこととなった。

3 資料の紹介

今回報告する資料群は全て、ダンボール1箱に一括して入れられていた。ダンボール箱の表面には、資料群の内容を示す注記の紙が張りつけられていた(図3)。紙には、「鉄鏃 1 鉄刀 2 朱若干 土玉 1 石斧 1」と書かれていた。この内容は、後述する実際の資料群の内容と幾分異な



図 1 寄贈当時の保管状況

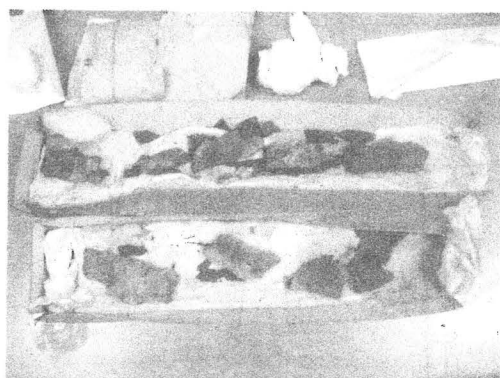


図 2 鉄刀の損壊状況

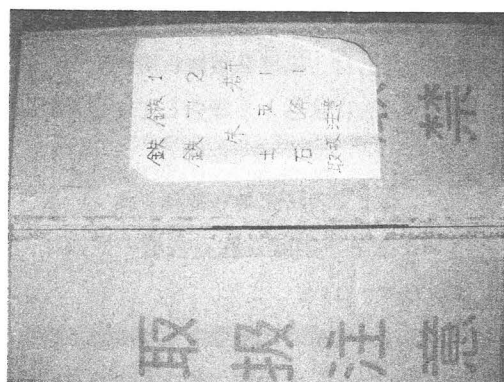


図 3 内容注記

っており、これはこの注記を書いた保管者が資料群の内容を把握しきれていなかったことを示している。そして、実際に箱の中に入っていた資料群の一覧は以下のとおりである。

鉄鏃 3 点、鉄刀 2 点、ガラス玉 2 点、不明金銅製品（破片） 少量、石斧・土玉 各 1 点、朱 若干

以下この順番で報告する。ただし、鉄製品の出土地については記述が少々煩雑となっているため、

次章の「出土地の検討」で扱うこととする。それ以外の資料については特に分ける必要はないため、ここで記述する。

○鉄鏃

鉄鏃は全部で 3 点あり、それぞれ順に鉄鏃 1・2・3 と呼称する(図版 1、図 4)。型式については全て古墳時代の後半段階に出現する長頸鏃に分類される(1)。寄贈時の保管状況については、鉄鏃 2 は、後に紹介する鉄刀 2 が入っていた箱の中に、剥き出しの状態が入っていた。鉄鏃 1 は、その箱の中に紙にくるんだ状態で入っていた。鉄鏃 3 は、鉄鏃 1 とは別の紙に包まれており、さらに鉄鏃 2・3 の頸部にあたると思われる破片が 2 点、鉄鏃 3 と同じ紙に包まれていた。各個体における細部の検討は、X 線透過写真を撮影した後に行った(図版 5)。各個体の詳細については、この後にそれぞれ触れていくが、3 点とも保管されていた環境は良好とは言えず、そのためどれも全体的に錆に覆われており、状態はあまり良くない。

鉄鏃 1 鉄鏃 1 は、鏃身の平面形が三角形で、なおかつ頸部の左側にのみ別造りの片腸挾（独立片逆刺）をもつ。そのため、型式的には三角式独立片逆刺長頸鏃に分類される。鉄鏃 1 の鏃身部は右辺の一部が折損して失われている。独立片逆刺は鏃身の根本の 3mm ほど下から、長さ 4cm ほど存在し、幅・厚さはともに 2mm を測る。

頸部は完存しており、下端部においては関も不明 瞭ながら確認することができる。しかし、

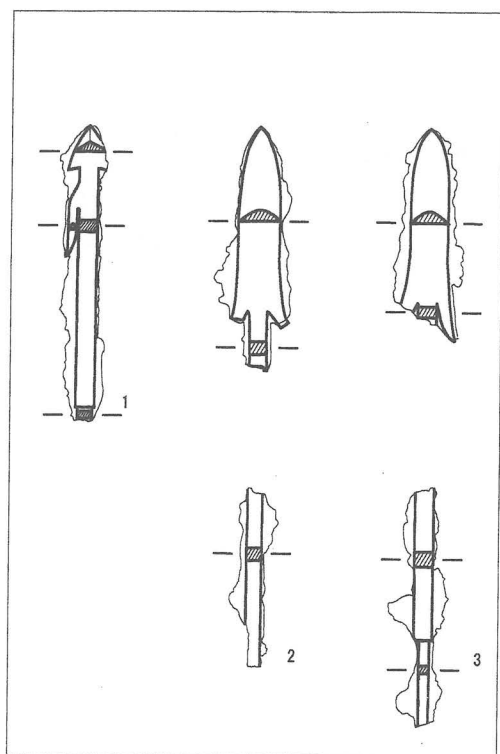


図 4 鉄鏃実測図(縮尺 1/2)

関のすぐ下で折損しているため茎部の長さを復元することはできない。断面形態は、鏃身部が片鑄造で、頸部は方形である。関の形態は角関である。

計測値は、残存長 7.8cm、鏃身長 1.15cm、鏃身幅 8mm、鏃身厚 2.5mm、頸部長 6.35cm、頸部幅 5mm、頸部厚 4mm、茎部残存長 3mm、茎部幅 4mm、茎部厚 2mm を測る。

鉄鏃 1 は、独立片逆刺が頸部との明確な屈曲を経て連続する形態を持ち、これは関義則氏が分類した中では B 類に属する(関 1991)。その中でも類例を挙げるならば、福岡県番塚古墳出土例が、平面・断面形ともに鉄鏃 1 と類似していると思われる。

ここで、これまでの研究から推測されている、独立片逆刺長頸鏃が副葬される古墳の性格についても触れておきたい。

鈴木一有氏は、古墳時代後期出土の形態が特殊な鉄鏃の分析を行い、その中で独立片逆刺長頸鏃は古墳時代中期中葉に成立し後期前葉から後に衰退していく型式で、「日本列島内の有力首長層に共有され」、出土古墳における甲冑との共伴関係から「中央政権が生産と配布に強く関与」したと記述している。

さらに鈴木氏は、独立片逆刺長頸鏃が朝鮮半島南部地域の古墳群から数例出土していることなどから、この鉄鏃が当該地域との深い関わりをもつ可能性を指摘しており、「朝鮮半島南部地域と深い関わりをもった人物が手にした特殊な鉄鏃」であるとこれを評価している。

これらの考えは、今回紹介した鉄鏃群の出土地を考える上で非常に参考になると筆者は考える。

鉄鏃 2 鉄鏃 2 は、その平面形の特徴から、型式は腸袂柳葉式長頸鏃であると思われる。しかし、逆刺の先端部分と頸部のほとんどが折損している。その鏃身平面形は、切先からやや弱いふくらを持ち、2cm ほど下がったところから直線となる。それが 1.5cm ほど続いた後、くびれて外に開いていき、そのまま逆刺へと続く。断面形態は鏃身が片丸造、頸部が方形である。

計測値は、残存長 6.4cm、鏃身長 4.85cm、鏃身幅は平面形が直線となる部分で 1cm、鏃身厚、3mm、頸部残存長 1.55cm、頸部幅 4.5mm、頸部厚 3.5mm を測る。

さらに、これと同一個体を形成する頸部片が存在する。しかし、鏃本体との接合はできず、頸部の形状から同一個体であると判断した。

この計測値は、残存長 4.65cm、頸部幅 4mm、頸部厚 3.5mm を測る。

鉄鏃 3 鉄鏃 3 の型式も鉄鏃 2 と同様に腸袂柳葉式長頸鏃で、同一個体である頸部片も同じく存在する。鉄鏃 3 は、逆刺の片方、及び頸部の大半が折損しているが、平面形は鉄鏃 2 とほぼ同

形だと考えられる。断面形態は、鏃身部が片丸造で、頸部が方形である。

計測値は、残存長は 5.6 cm、鏃身長 4.6 cm、鏃身幅 1 cm、鏃身厚 3mm、頸部残存長 6.5mm、頸部幅 5mm、頸部厚 3mm を測る。

頸部片は、端部付近に不明瞭ではあるが関が確認できることから、頸部と茎部の接合部を構成する部分だと考える。関の形態は角関である。ちなみに鏃本体との接合はできなかった。

計測値は、頸部残存長 6.3cm、頸部幅 5mm、頸部厚 4mm、茎部残存長 2.3cm、茎部幅 2.5mm、茎部厚 2mm を測る。

これら鉄鏃 2・3 の類例は、石川県能美郡辰口町の下開発茶臼山古墳群出土例などがある（石川県辰口町教育委員会 2004）。当古墳群の 15 号墳第 1 主体部から出土した鉄鏃は、平面形などの特徴が鉄鏃 2・3 と類似している。更に関西学院大学のある兵庫県内で探してみると、主に日本海側によく似た形態のものが確認できる（2）。そして、これらの古墳の多くが陶器須恵器編年 MT15 期の須恵器を共伴していることから、鉄鏃 2・3 も当該期の古墳から出土した可能性が高いものと判断できる。

○鉄刀

鉄刀は、全部で 2 点寄贈していただいた(図版 1)。どちらも完形品ではなく数点の破片から構成されており、それぞれ鉄刀 1・2 と呼称する（3）。寄贈時の保管状態は、鉄刀 1 は紙で覆われ、そのまま竹筒の中に入っていた。鉄刀 2 は、当初は多数の鉄片の状態で 2 つの箱にばらばらに分けて保管されていたが、修復を行った結果、2 箱で 1 個体の鉄刀 2 を復元できた。保管されていた状態が悪かったこともあり、2 点とも表面が全体的に錆に覆われており、遺存状況は良好ではない。そのため、形状から副葬年代を特定することは困難だと考える。しかし、できる限り各個体のデータを得るため、鉄鏃と同様、X 線透過写真を撮影した後に細部の検討を行った(図版 6)（鉄刀 2 については接合できない破片を多く含むため、その中からある程度形状のしっかりした大きな破片を選別して撮影を行った）。

鉄刀 1 鉄刀 1 は、計 2 点の破片より構成されており、大きい方を鉄刀 1-a、小さい方を鉄刀 1-b と呼称する。鉄刀 1-a は、刀の切先から刀身の半ばまでに当たる。計測値は、残存長 34.0cm、最大幅 3.0cm、最大厚 0.7cm を測る。切先はふくらをなし、刀身の背には一部木質が付着している。この木質は、もともと刀が収納されていた鞘が外れた際に付着したものと考えられる。次に、鉄刀 1-b は、残存長 10.5cm、最大幅 3.1cm、最大厚 2.0cm を測り、刀身の一部に当たる。鉄刀 1-a と 1-b は接合できない。

鉄刀 2 鉄刀 2 は、多数の鉄片から構成されており、接合できなかった小片も多数含まれている。今回は、その中で、刀のどの位置に当たるか推定できる 4 片について報告する。それぞれ鉄刀 2-a・b・c・d と呼称する。鉄刀 2-a～c はいずれも刀身部に当たると判断する。鉄刀 2-a の計測値は、残存長 35.5cm、最大幅 3.5cm、最大厚 1.7cm で、鉄刀 2-b は残存長 7.9cm、最大幅 3.1cm、鉄刀 2-c は残存長 8.0cm、最大幅 2.8cm、最大厚 1.0cm を測る。鉄刀 2-d は残存長 11.4cm、最大幅 2.6cm を測り、その形状から鉄刀 2 の茎部の一部であったと考える。

○ガラス玉

材質がガラス製の玉が 2 点、ともに鉄刀 2-a の錆の部分に付着していた。注記はなかったため、これまでの保管者は認識していなかったものと考ええる。

ガラス玉 1 は、鉄刀 2 の刀片の中央付近に付着しており、色調はやや淡い緑色を呈す(図版 2)。表面のほぼ全体が鉄刀 2 の錆で隠れていたため、法量を計測することはできなかった。

ガラス玉 2 は、鉄刀 2 の刀片の端部に付着しており、色調は黒色を呈す。こちらも同様に全体が刀の錆に覆われているがある程度法量の計測は可能で、直径 2.5mm を測る。

○不明金銅製品

鉄刀 2 の収納されていた箱の中から、明らかに鉄製のものとは違う色調の金属片を数片、発見した(図版 3)。表面の状態などから刀や鉄鏃とほぼ時期を同じくする金銅製品の破片であると判断する。しかし、非常に微細な破片であるため、どのような製品の破片であったのかはわからず、詳細は不明である。

○石斧・土玉

石斧・土玉はともに 1 点ずつあり、2 点は共に紙に包まれた状態で保管されていた(図版 4)。それと共に、「宮城県出土 石斧」「宮城県出土 土玉」とだけ書かれた遺物カードがそれぞれと同様に保管されていたため、出土地としては宮城県内のものと判断してよいと考える (4) (5)。

石斧 宮城県出土とされる一点の石斧は、平面が縦長二等辺三角形、断面が隅丸長方形をしている。二等辺三角形の短辺を底辺とした際の、底辺と高さ、更に断面の最大厚を計測した。底辺が 4.5cm、高さが 10.5cm、最大厚が 2.5cm である。基部には磨痕が見られる。そして、磨痕の切り合いからは、三回の研磨の先後関係が見て取れる箇所があり、定形を意図していた様子がうかがえる。これらの特徴から、この石斧は定角式磨製石斧であると言える。なお、帰属時期についてははっきりしないが、東北地方においては、定角式磨製石斧が定型化する縄文時代後期、もしくは、それが増加するようになる縄文時代晩期に、似たような形状の石斧が見られるので、それらの時期に属すると思われる。さらに、両面の欠損と刃部のツブレから、この石斧はかなり使用されたものであると考えられる。また、三箇所に新欠した箇所が見られる。

土玉 一点の土玉は、完全な球形ではなく、そぎ落としたような扁平部が対となっており、その箇所にそれぞれ孔がある。そして、両者は貫通しておらず、両者を比較すると、一方は、深めで、中心に向かって直径が狭まってゆくものであり、他方は、浅めで、それほど直径は狭まらないものである。法量は、孔を上下に置いた状態で計測した。直径が 2.9～3.1cm で高さが 3.1cm である。なお、帰属時期については、縄文時代であると思われるが、詳細については不明である。

○朱

朱は全て「奈良縣教育委員会」と書かれた封筒の中に入れられていた(図 5)。やや粘質の土と混ざ

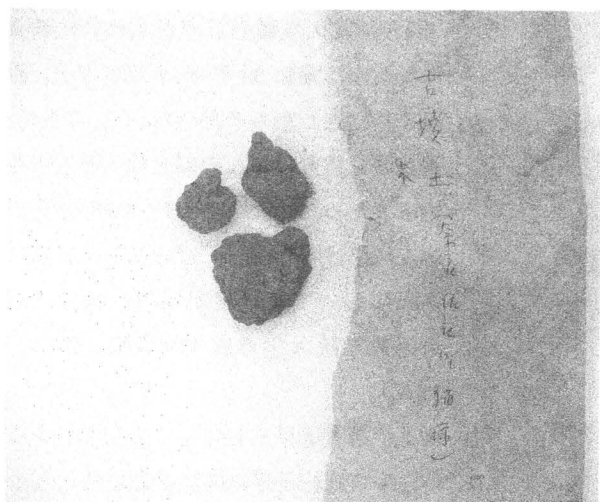


図5 朱(右は収納されていた封筒)

っており、重量を量ったところ 50 g だった。更に封筒には、「古墳(出)土朱 奈良県佐紀町猫塚」と書かれているため、奈良県佐紀町猫塚古墳出土のものと思われる。報告書によれば前方部埋葬施設の棺内に大量の朱が使用されていた、という記述があり、紹介する朱もその一部ではないかと考える(中村・小島 1959)。

奈良県教育委員会の封筒に入っていたことから考えて、武藤氏が何らかの理由でサンプルとして入手してきたものと考えられるが、それ以上の経緯については不明である。

4 出土地の検討

ここでは、前章で紹介した資料群の中から鉄製品を主に取り上げて、その出土地について考えてみたいと思う。最初に述べたとおり、ほとんどの資料は震災などで損傷を受け、詳細な情報が得られない状態である。しかし、各資料に関するいくつかの注記が手がかりとして残されている。

鉄製品の中では、鉄刀 1 が入っていた竹筒の表面に「雲雀丘出土鉄剣」という注記が書かれていた(図 6)。「雲雀丘」というのは、兵庫県宝塚市雲雀ケ丘古墳群のことである。

当古墳群は昭和 29 年に発掘調査を行っており、その調査担当者の一人が武藤氏であったことが「宝塚市史」に記述されている(武藤・橋本 1977)。また、その後考古学研究会でも幾度か雲雀ケ丘を含めた長尾山丘陵の群集墳の測量調査を行い、本紙において調査報告を行っている(関西学院大学考古学研究会 1978・1979・1980・1987・1991)。そして、「市史」や他の関連文献を手がかりに出土地の特定を試みたところ、雲雀ケ丘古墳群内において鉄剣が出土したと報告されている古墳は、雲雀ケ丘 C 南群 1 号墳の 1 基のみであった(石野 1971)(宝塚市教育委員会 1980)(6)。

そこで、宝塚市に確認を取ったところ、当該古墳から出土した鉄剣は現在宝塚市の方では所蔵しておらず、所在地不明となっていた。よって、鉄刀 1 は雲雀ケ丘 C 南群一号墳出土である可能性が極めて高いと判断する(7)。

次に、鉄鏃群と鉄刀 2 についてだが、鉄刀 1 の結論からこれらが同様に宝塚市出土のものである可能性は十分考えられる。

しかし、他の地域の出土地である可能性も考慮するため、武藤氏が顧問であった頃の考古学研究会の OB・OG の方々にお話を伺った(8)。そうしたところ、鉄鏃群については関西学院大学構内古墳出土のものではないかという情報を得た。

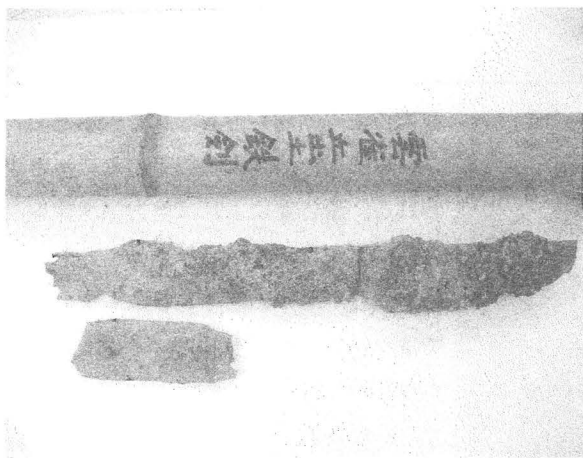


図6 鉄刀1 注記

関西学院大学構内古墳が本格的に調査されたのは昭和34年で、「西宮市史」編纂を契機としたものだった。そして当時、調査の主体となったのが武藤氏と関学考古研であった(武藤1959・1967)。その調査成果は「市史」だけではなく、後に本紙においても幾度か報告されている(関西学院大学考古学研究会1975・1976)。

その調査成果として、この古墳が少なくとも6世紀後半以降に築造されたものであることが分かっている。この古墳の

年代観は鉄鏃群の年代観と一致していない。そのため筆者は、今回紹介した鉄鏃群が関学構内古墳から出土したものではないと判断する。

しかし念のため、西宮市に確認を取り、関西学院大学構内古墳出土の鉄製品のうち唯一保管されていた鉄鏃の頸部片や、西宮市出土の古墳時代後期の鉄鏃を数点実見させていただいた(9)。その上で、これらが西宮市出土である可能性を考えてみたい。鉄鏃1は前述したとおり、非常に特殊な型式であり、鉄鏃2・3についても出土例があまり見られない。そのことから出土地の確定についてはやはり慎重にならざるを得ないと思う。よって、西宮市出土の可能性についても他の地域と同程度の可能性として考慮するに留めておきたいと思う。

鉄刀2については、資料自体に損傷が激しく、残存部分にも特徴があまり見られないことから、出土地の特定はきわめて困難だと考える。しかし、他の鉄製品との共判関係を考慮すると、将来他の資料の出土地が確定できた際に、鉄刀2についても何らかの手がかりが見つかるものと考えたい。

以上、鉄製品の出土地について検討してきたが、鉄鏃群や鉄刀2については今回検討した地域以外の場所から出土した可能性についても十分考慮すべきであるということを最後に示唆しておく。

5 おわりに

これまで、今回所蔵した資料を順に紹介しつつ、出土地の検討も行ってきた。出土地については特定が非常に難しく、そのため曖昧な表現が多くなってしまった。これについては筆者の調査が不十分であったためであり、今後の課題とすることでご容赦願いたい。特に、鉄鏃群の検討については先行研究をより活用するべきであると感じた。これについても今後の課題としたい。

さて、今後の資料群の保管についてだが、会の予算の都合上、保存は非常に簡易的な手段に頼らざるを得ないと思う。よりしっかりとした保存を望むのであれば、然るべき研究機関に寄贈す

るという選択肢もある。そもそも、今回所蔵した資料群は、1 サークルが保存・活用するには非常に扱いが難しいものであり、今後この資料群をどのように扱っていくかは研究会の大きな課題となるだろう。

ここで筆者は、この資料群をできる限り研究会内において保管していくことを推奨しておきたい。それは、学生が貴重な資料に触れる機会をより多く得ることにより、少しでも学内の学生に考古学への興味関心をもってもらいたいと考えるからである。また何より、この資料群を今後関西学院大学考古学研究会の「象徴」とすることにより活動をより盛んにしてもらいたいということを願うという意見でもある。これはあくまでも筆者の一私見であり、実際の資料群の行き先については会員たちの賢明な判断を期待したい。

最後に、今回報告した資料群の名称についてだが、ただ単に「関西学院大学考古学研究会所蔵資料」と呼ぶと、これまで OB・OG の方々が収集した資料と混同してしまう可能性がある。そこで最初の所蔵者であり、長年考古学研究会を牽引していただいた武藤誠氏に敬意を表し、この資料群を「武藤コレクション」と命名したいと思う。そしてこの「武藤コレクション」のもと、考古学研究会が大いに発展していくことを切に願う。

謝辞

本稿を作成するにあたり、以下の方々からご教示とご意見をいただいた。その中でも、大手前大学史学研究所の岩本崇氏・森下章司氏には写真撮影等の面で大変お世話になった。特に岩本氏には資料群の調査の全面にわたってご高配をいただいた。また本稿は関西学生考古学研究会の例会において発表し、多くの人々の目に触れる機会を得た。その際事務局の方々には大変お世話になった。さらに関西学院大学の高田祐一・望月悠佑両先輩方には本稿の掲載を快く了承していただき、ご指導をいただいた。末筆ながら記して謝意を申し上げたい。

板橋弘樹(立命館大学)、上峯篤史(同志社大学大学院)、岡野慶隆(川西市教育委員会)、折井千枝子(明石市教育委員会)、合田茂伸(西宮市教育委員会)、瀧田雪江(奈良女子大学大学院)、直宮憲一(宝塚市教育委員会)、西口和彦(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所)、松田度(奈良県大淀町教育委員会) (五十音順 敬称略)

【注】

- (1) 鉄鏃の各部名称については水野敏典氏の研究を参考にした(水野 2003)。
- (2) 兵庫県旧日高町馬塚古墳において鉄鏃 1・2 と類似する腸挟柳葉式長頸鏃が出土しているとの情報を、岩本氏より御教示いただいた。岩本氏には各資料の類例の検索においても全般的に御教示をいただいた。
- (3) 鉄刀の各部名称については臼杵勲氏の研究を参考にした(臼杵 1984)。
- (4) 遺物カードは「石斧」「土玉」以外にも、「土偶」「石棒」と書かれたものも同様に保管され

ており、「石斧」「土玉」と同様「宮城県出土」という注記がどちらにも書かれていた。

- (5) これらの資料の入手経路については、関学考古研 OB で宮城県出身の石野博信氏に関係があるのではないかと現時点では考えている。しかし、残念ながら石野氏御本人に確認を取ることができなかった。今後確認していく課題としたい。
- (6) 更に、鉄刀 1 の注記にあった「鉄剣」の記載と、武藤氏が編者となっていた「宝塚市史」の当該古墳の「鉄剣 2 口」という記載が一致することからも、鉄刀 1 が当該古墳出土品である蓋然性が高いと判断した。
- (7) 雲雀ヶ丘古墳群については、宝塚市教育委員会の直宮氏より有益な御助言をいただいた。直宮氏には、鉄刀を実見していただき、当該古墳出土である可能性が高いことも確認していただいた。
- (7) 関学考古研の昔の調査内容については、元研究会会員の岡野・折井・西口の各氏より御教示いただいた。
- (8) 西宮地域の鉄製品の様相については、西宮市教育委員会の合田氏より文献等を提示してもらい、御教示をいただいた（具足塚発掘調査団 1976）。

【参考文献】

- 石川県辰口町教育委員会 2004「下開発茶白山古墳群Ⅱ」p.86～88 辰口町教育委員会
- 石野博信 1971「宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集 p.69～85 兵庫県社会文化協会
- 臼杵勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 p.49～56 古墳文化研究会
- 関西学院大学考古学研究会 1975「構内古墳現状・遺物報告」『関西学院考古』No.2 関西学院大学考古学研究会
- 関西学院大学考古学研究会 1976「仁川流域の後期古墳」『関西学院考古』No.3 関西学院大学考古学研究会
- 関西学院大学考古学研究会 1978,1979,1980,1987,1991「長尾山の古墳群（Ⅰ～Ⅴ）」『関西学院考古』No.4,5,6,8,9 関西学院大学考古学研究会
- 具足塚発掘調査団（編）1976「具足塚発掘調査報告」西宮市教育委員会
- 鈴木一有 2003「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所『研究紀要第10号』
- 関義則 1991「逆刺独立三角・柳葉形鉄鏃の消長とその意義」『埼玉県考古学論集』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宝塚市教育委員会 1980「長尾山の古墳群調査集報」『宝塚文化財調査報告第14集』宝塚市教育委員会

中村春寿・小島俊次 「奈良市佐紀町猫塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』12 奈良
県教育委員会

水野敏典 2003 「古墳時代中期における鉄鍬の分類と編年」『橿原考古学研究所論集 第十四』p
258,259 八木書店

武藤誠 1959 「考古学上から見た古代の西宮地方」『西宮市史』第一巻 p 349～364 西宮市役所

武藤誠 1967 「埋蔵文化財調査記録」「西宮市史」第七巻 資料編 4 p 520～543 西宮市役所

武藤誠 1977 「雲雀丘古墳群」『宝塚市史』第四巻 資料編 I p 115

(2007年3月 脱稿)